

令和7年度東京都広報コンクール 総評 写真部門

西垣委員

初めて審査に携わらせていただきました。最初は手探りでドキドキしながら手にとっていましたが、だんだん記事に引き込まれ、楽しくなっていました。広報紙は駅や図書館などで見かけますが、手にとって見たことはありませんでした。しかしながら今回、各地の広報紙を見て、記事を読み、あわせて皆さまの制作意図も拝読したことにより、広報紙を作成する皆さまが大きな情熱を傾けて紙面作りをされていることを知り、感動しました。

写真撮影も時間をかけて撮影にのぞんでいたりと、チームを組んで取材をしたり、被写体との距離を縮める努力など、素晴らしいと思いました。紙面づくりも、テーマ設定から文章、デザイン、レイアウト、様々考えられていることが分かりました。各地の広報紙をもっと多くの方に届けたい、知ってほしいと心から思いました。

審査をさせていただきながら、一番気になったのは印刷の色です。いろいろな制約があるのでしょうけれど、実際の写真よりも薄い色で印刷されているものが多く見られました。今回はオリジナルの写真を拝見しているので、写真の方が色が良いと感ずることが多々ありました。なぜ正しくない色の印刷になってしまったのかな、白っぽい印刷にされるのかな、などという作品がかなりあり、写真を生かし切れておらず、もったいないと感じました。印刷そのものにも目を向けていただけると良いと思います。撮影に関しては、やはりトリミングをしていない、すなわちオリジナルの写真をそのまま使えるものほど撮影時に紙面や構図を考えているのだと思います。トリミングとはオリジナルの写真から不要な部分をカットすることです。もちろん意識的に最初から切り抜きを前提とすることもありますし、撮影環境で余計な部分を入れざるを得ないこともあります。しかしトリミングをするということは、その時点でもう一度構図を決めるということであり、使うカメラによっては質も悪くなるので要注意です。明確な意図をもって1枚の写真撮影に向かうことは良いことです。また真逆ではありますが、一瞬の出あいでシャッターを切ることもあります。一期一会のチャンスを優先する撮り方もあります。時と場合によりますが、どちらも写真の醍醐味です。最後にもう一つ気になったのは、影の扱いです。写真に光を感じることが良いことであり、光があれば影ができます。その影が被写体を損なうのは残念です。今回は、顔が影になっている写真が多いと感じました。顔の影は顔全体をフラットにし見やすくする効果もありますが、暗い感じにしてしまうこともあります。目障りな影よりは良い場合もあります。そのシチュエーションしだいではありますが、顔のみでなく背景、風景、建物等、全てに言えることです。光と影をよく観察して上手に生かすとより良い写真になると思います。

写真はノンバーバル表現、言葉を使わない表現です。このコンクールを面白いと思ったのは、言葉と共に紙面ができあがっており、それを評価する点です。普通の写真作品でもタイトルがあり、ステイトメントがありますが、それ以上に言葉による説明があるのが広報紙です。その記事にどれほど写真が貢献できているかというのは、写真と言葉の相乗効果がどれだけ大きいかということだと思います。写真と言葉で効果的に伝えていくことを、これからも試行錯誤して頑張ってください。

このお仕事をさせていただいてから、町で広報紙を見ると、手に取り持ち帰るようになりました。無料だということにも驚きです。良い経験をさせていただきました。ありがとうございました。東京都の各地の広報紙が多くの人々に届き、読まれることを心から願っております。

箭内委員

令和7年度「写真部門」への参加自治体数は＜14区17市2町 計33区市町＞となり、令和始まって以来、最多の参加数を記録しました。これもひとえに、各自治体皆さま方の熱意の顯れかと思えます。日々の広報活動へのご尽力に、改めて感謝を申し上げます。

さて、今年度は例年にも増してハイレベルな作品が多く、上位で拮抗した点が印象的でした。その中で一步秀でた入賞作には、共通してプラスαのグッと惹かれるアイディアがありました。例えば、目黒区の「1枚写真」最優秀作品には、落語「目黒のサンマ」を絡めたユーモアがあり、新宿区の「組み写真」最優秀作品には、世界陸上をサポートする中学生たちの陸上部活動を追う、という独創的な着眼点がありました。そして、それらの堅固な基盤となっていたのが、的確な撮影技術、強いメッセージ性、目を引くデザインに裏打ちされた、訴求力のある豊かな紙面表現でした。

広報紙の作業分野は多岐にわたり、多くの方々が制作に携わっている事と思えます。そこでいかにチームとしてイメージを共有し、同じ完成形を思い描けるか。その点が肝なのではないでしょうか。上記2作品に限らず、総じて高評価だった作品からは、印刷も含め、一貫して様々な工程への細かな心くばりが感じられました。

いっぽうで新たな課題も見えました。「画像の加工・合成」についてです。今回、明確な表現意図をもって「1枚写真」に多少の加工・合成を施した作品が幾つかありましたが、その旨は調査票に記されており、応募者の丁寧さを感じました。ただやはり、デリケートな問題なので、当コンクールにおいてどこまで加工・合成が許されるのかは、多くの方にとって気になる点ではないでしょうか。

そこで、令和7年全国広報コンクールの「応募要領」を調べました。提出すべき参考写真プリントとして（未修整・未加工・トリミング前のもの）との記載がありましたが、特にそれ以上デジタル処理への言及はありませんでした。ですので、一審査員としての判断をお答えしますと、「写真のリアリティを損なうような、過度な加工は避けるべき」だと考えます。なぜなら、写真は一般的に、そこに実在するものを写し込み、リアリティを表現するアートだからです。ゆえに「元々ある物を消す」「元々無い物を足す」といったデジタル加工には、十分な配慮が必要だといえるでしょう。応募作がこれに該当する場合には、加工の程度によって、当然、審査に影響が及ぶものと考えます。

ただ、これはコンクール審査上の話であり、広報紙表現全般を指しているわけではありません。その紙面やテーマにおいて、適度な加工・合成でより表現が豊かになり、読者にも伝わり易く、かつ許容範囲と捉えるならば、そこは個々の判断で掲載して全く問題ないと思われます。ちなみに、明暗やコントラストや色味の調整は、フィルム時代から行われてきた作業ですので、極端な逸脱がなければ、必要不可欠な画像編集（レタッチ）だと考えます。

次に撮影技術についてです。高性能な最新カメラ使用の増加に伴い、高感度（高 ISO）設定での、高速シャッター撮影が増えました。高速シャッターは被写体ブレを防ぐ上で非常に有効なので、たいへん喜ばしいことです。ただ、多少暗くても写るようになった反面、ストロボ撮影への創意工夫が見られない点が気になりました。

例えば、動きのある人物を屋内で撮る、という場面。高 ISO・高速シャッターで撮ったものの顔が暗く、明るくレタッチすることでどうにか救われた、という例が少なくありませんでした。「帽子を被った夏場の子ども」にも同じことが言えます。顔を明るく表現できるストロボ照射は非常に効果的で、特に表紙などでは見た目もキレイです。撮影技術・表現力向上のためにも、できればストロボを常備し、取材状況に合わせて臨機応変にストロボの有無を選択できるようになると、よりいっそう表現の幅が広がるでしょう。プロ以外の方でも、ぜひストロボ使用にチャレンジしてみてください。

最後に、調査票「撮影データ」の記載漏れがだいぶ少なくなり、たいへん助かりました。カメラ機材・ISO 感度（例：ISO 800）・シャッタースピード（例：1/250）・絞り値（例：F8）は、どのような表現意図で撮影されたのかを知る上で、非常に重要なデータです。もし不明の場合には、jpg ファイルのプロパティに情報が残っていますので、ぜひご確認ください。

以上、今年度も全応募作品と真摯に向き合い、公平に審査をさせて頂きました。以前にも増して意欲的に取り組んでくださった自治体や、前年のアドバイスを活かしてくださったと思われる作品もあり、たいへん嬉しく感じました。

改めまして、本年度も数多くの力作をご応募頂き、誠にありがとうございました。これからもぜひ、地域と住民皆様のために、より魅力的な広報紙をご制作ください。